



意宇川堤防道路より望む六所神社

これは、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が、1891年（明治24年）4月5日、意宇川（いがわ）流域の由緒ある神社にお参りする「意宇六社めぐり」に出た時のことを記した文章です（『知られぬ日本の面影』八旧題・日本警見記Ⅴ中の「八重垣神社」の一節）。

意宇平野は、「国造（こくぞう）」として古代出雲を統治した出雲臣（いずものおみ）の本拠地とされています。7世紀半ばの律令制の導入により、地方の国造は廃止され、中央から国司が派遣されるようになります。

◆六所神社

意宇平野の中央南端、意宇川ほとりの出雲国跡に鎮座しているのが、「六所（ろくしょ）神社」です。「六所」とは、天地四方（天地と東西南北の六方）の神をあわせ祀（まつ）るという意味のことです。



千木本殿と拜殿

案内板に「当時は国庁の隣接地にあつたと考えられていますが、平安時代以降に国府が衰退していくと、神社はかつての（国庁の※筆者注）中心地に信仰され現在に至っています」とあります。

ちなみに、ハーンの「意宇六社めぐり」には、「心の友」といわれた、中学校教頭の西田千太郎が同行しています。当日の西田の日記には、「途中車覆りテ稍（やや）破損セル所アリシモ幸ニシテ身体ニハ輕微ノ負傷モナシ」とあります。どうやら、途中でハーン先生の人力車が転覆するというアクシデントがあつたものの、幸い大事に至らなかつたようです。これも意宇の神々のご加護があつたからでしょうか？

「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を礎に発信していきます。ご投稿はメール、ファクスでお願いいたします。

後記
「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を礎に発信していきます。ご投稿はメール、ファクスでお願いいたします。

後記
「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を礎に発信していきます。ご投稿はメール、ファクスでお願いいたします。

「悠久の河」意宇川紀行②

「八重垣神社のある佐草」という村は、松江から南へざっと一里あまりのところにある。しかし、そこへ行くには、俵でたいぶ険しい、うねうねした、ひどい道を行かなければならぬ。三つある道筋のうち、いちばん長くて、いちばん悪い道が、偶然にもいちばんおもしろい道で、竹やぶだの原始林のなかの山道を登ったり下ったり、あるところは、稲田や麦畑の中をうねうね行かかと思つと、藍だのニンジンだのを作つている、ちよつと風変わりな美しい景色のなかを、通つていったりする。その途中には、有名な神社がたくさんある。

一村一志

「夢の芽生える文化」創造のプラットホーム
「八雲志人館」は、将来に向けて持続可能な地域を創出することをめざして活動します。

「意宇六社めぐり」と出雲国分寺跡

旧暦10月は全国的には「神無月（かんなづき）」ですが、出雲では「神有月（かみありづき）」です。この月に、出雲大社や佐太神社（松江市鹿島町）で行われる神在祭（かみありさ）に、全国から八百万（やおよろず）の神々が集結されるそうです。佐太神社の場合、祖神であるイザナミノミコトの法事に集まられるとの言い伝えがあります。六所神社に集まり、その後、佐太神社に向かわれると伝えられています。



国分寺跡

◆出雲国分寺跡

出雲国府跡の東北1.3km、意宇平野の北端に、国指定史跡の出雲国分寺跡（松江市竹矢町）があります。



天平古道

国分寺跡から南にまっすぐに延びる道があります。第1回目の発掘調査の時、「千ばつの年に、3間くらいの幅でずつと稲がしおれた」という地元の話に基づいて調査が行われた結果、道路幅4m、両側に1mずつの側溝のある石敷きの道が、水田の下から発見されました。国分寺への参道と推定され、「天平古道」というゆかしい名がつけられました。これも国の史跡に指定されましたが、現在は古道の上に土が盛られ、農道として使用されています。

術文化の粋を集めてつくられたもので、人々は初めて見る寺院に目を見張つたことでしょう（案内板）。



発掘調査現場見学

参加者が、松江プラバ少年少女合唱隊のコンサートなどがあり、



松江プラバ少年少女合唱隊

国府まつり

10月18日（日）、史跡出雲国府跡で「国府まつり」（主催：八雲立つ風土記の丘展示学習館）が開催されました。爽やかな秋風の吹く晴天のもと、地元産のとれたて野菜市、勾玉づくり・火起こしなど、の体験コーナー、松江プラバ少年少女合唱隊のコンサートなどがあり、